

## 「良心」は海外で人種問題に応えたか—大久保真次郎と清水安三

講演	佐原 光児【さはら・こうじ】
講師紹介	桜美林大学芸術化学群准教授・大学チャプレン

## はじめに

皆さん、こんにちは。桜美林大学芸術化学群で教員及び大学チャプレンをしている佐原光児です。早速ですが、皆さんは桜美林大学をご存知でしょうか。東京の町田にあり、「桜が美しい林」と書いて桜美林です。後で触れますが、実は同志社と桜美林は結びつきがあります。今日はDoshisha Spirit Weekということで同志社精神について一緒に考えたいと思いますが、二人の人物を扱います。大久保真次郎（1855—1914）と清水安三（1891—1988）です。この二人は時代が若干異なりますが同志社で学び、それぞれ新島襄を強く慕っていました。大久保は新島と直接的な関わりを持ち、一度は激しく反発して同志社を離れますが、後に新島の元に帰ってきた人です。もう一人の清水は新島召天の翌年に生まれたので、直接新島と会ったことはありません。しかし、清水は17歳の頃に新島が残した言葉に出会い、自らの視野を大きく変えられます。そして生涯、新島を教育者の理想として追求めたのです。

## 自己紹介と扱う人物たちについて

本題に入る前に、なぜわたしが大久保と清水を扱うかに併せて簡単な自己紹介をさせていただきます。わたしは同志社大学出身で、学部は神学部でした。わたしの学生時代は「1日に3人神学部生に出会うと幸せになれる」という都市伝説があったのですが、今もあるでしょうか。他学部生にとっては珍しい存在かもしれませんが、神学部内では飽きるほど見ますのに、皆それぞれ悩みを抱えているように見えましたから、神学部内では効果が薄かったようです。

その後、神学研究科で修士課程を修了した後、東京の日本キリスト教団霊南坂教会で5年働き、その後アメリカ・カリフォルニア州にある日系教会のシカモア組合教会で5年半働きました。この教会は、今から約120年前（1904年）に日本からの移民たちが創立した教会です。この教会の初代牧師が、先ほど紹介した大久保真次郎なのです。現在も人種差別は大きな課題ですが、大久保は日本人移民への激しい排斥気運の中、それに対抗できる共同体、それもキリスト教信仰をベースにした共同体を創設します。近年のBLM（ブラック・ライブズ・マター）運動、あるいは約67年前に黒人の人権運動を開始したキング牧師たちよりもずっと前です。

わたしは約5年半シカモア組合教会に勤めながら現地の大学院でも学び、2015年に日本に帰国しました。そして東京にある明治学院高等学校（キリスト教主義学校）で聖書科教員として5年働いた後、現在の桜美林大学へと移ってきました。現在、桜美林学園は幼稚園、中高、大学、大学院を備えています。この学園創立者が先ほど紹介した二人目の人物、清水安三なのです。

大久保と清水は時代も性格も異なりますが、共通点としては新島の人物や生き方、言葉に深く感銘を受けて慕っていたことに加えて、海外において人種問題や尊厳に関わるような実践を持つ点です。これらの実践を紹介し、新島が築いた同志社のスピリットが、あるいは「良心」が、この二人を通して海外でどのように体现されたかを考察します。

## 新島の直弟子：大久保真次郎

まず大久保ですが、彼は比較的初期に同志社（英学校時代）で学んだ人物で、新島との繋がりは興味深いものがあります。大久保はユニークな人物ですが、当初同志社にとっては問題児に映っていたことでしょう。

熊本県出身の大久保は熊本医学校で学んでいました。この医学校は、アメリカ陸軍の軍人であったL. L. ジェーンズが教えた「熊本バンド」の名で有名な熊本洋学校に併設されていました。ちなみに、この洋学校は後に閉鎖されますが、その時優秀な学生たちが初期の同志社に移っています。大久保は1874年に東京医学校（現・東京大学の医学部）に移り、医師を目指していました。しかし、彼は医療世界に見切りをつけ、人の魂や心に全てを費やす道を模索します。1877年に医学校を中退し、長い歴史を有する仏教の奥義を求めて、ある京都の寺院の門を叩くのです。しかし、そこで彼の目に映ったのは墮落した仏教の姿でした。大久保はそこを去り、まるで宗教への鬱憤を晴らすかのように、今度はキリスト教に先手を向けます。それが同志社でした。キリスト教が誤った宗教だと証明し、論破することが目的だったようです。

大久保はこの時、同志社で三日三晩白熱した議論の末に同志社入学を決意したと言われています。そして1878年に新島襄から洗礼を受けるのですが、その翌年1879年には問題を起こして同志社を中退するのです。同志社を去る時、新島に暴言を吐いて出ていったと言われています。なかなかの問題児でしょう。

その後、大久保は海運業や製糸業、民権運動に携わるのですが、長続きせずに挫折を経験します。さらには酒に溺れてしまい、家族に無理と心配を強いる生活が続きます。大久保は後に同志社に再入学するのですが、その時に新島に出した手紙によると、その挫折生活は次のとおりです。「回顧すれば（略）無禮を極めて閣下に背きてより（略）再びキリストを信ずるに至るまで、凡（およ）そ八ヶ年間は、恐る可き境遇に墮落し今より思ひ巡らすも戦慄に堪へざるなり。」（久白落実『父と良人』東京市民教団出版部 1936年 43~44頁）

## 大久保の回心、再度同志社へ

1877年1月（同志社を離れて約8年後）に大久保は回心し、その後同志社へ再入学します。酒に溺れる生活をしていた大久保はある日、妻に聖書を借り（自分の聖書は同志社を去る時に燃やしていた）、次のように語りかけます。「此れはもう酒は呑まぬ、お前の聖書を貸せ、そして誰れも来るな、昼飯はいらぬ」（同 42頁）。彼は数日に渡って聖書をひたすら読んで祈り、ついに「俺は新島先生のところへ帰る」と家族に告げたのです。そして、同年9月に同志社へ再入学し、その後は一変して心から新島を師と仰ぎ続けました。

大久保の娘・久白落実が著した『父と良人』には、大久保の礼拝メッセージが収められています。そこには大久保の初期の新島への印象と、回心後に再入学した時の新島への印象が書かれており、前後比較ができます。

【当初】「當時の彼は身には破れたる洋服を着し 古びたるカバンを背負ひ竊々として東奔西走 宣教師にいちめられ 官吏に苦しめられ人民には忌み嫌はれ 書生には駄々をこねられ甚だしきは居候書生は勿論盲目生迄に口を極めて罵られたり 彼は其度毎に唯目を睨りて唯々として熱き涙を垂れ黙然として跪き合掌して神に祈りたり 遠慮なく形容せば實に長家の犬とも云ふべかりしなり 心なき我輩は彼を堪忍強き愚直一片の耶穌坊主と看做し勿論尊敬の念杯は毫もあらざりし」

【回心後】「予殆ど十年間 躰けり 覚醒の後 彼に面す彼は昔日の彼にあらず 彼の眼中殆ど天下に人無きが如し 彼は最早泣上戸にして堪忍強き 講経 詭譎をのみ事とする愚直一片の坊主にあらず 矢張り沈黙寡黙なりと 雖も胸中萬斛の思ひあるにや眼に無限の慈愛頭はれ居るなり 温情優待に至らざるなしと雖も 心に百鍊の鉄をも鎔かす意思あるにや毫も 押るべからざる威厳あるなり（中略）見るべし彼は確然不動の信念を以て 屹立す 彼は實に心霊界の大燈明臺なり。」（『父と良人』 262~264頁）

昔の文章で分かりにくくなっていますので、わたしの言葉でその主旨をお伝えします。

「最初に会った頃の新島先生は、くたびれた洋服を着て、古い鞆を背負い、度々東へ西へ奔走していた。宣教師にはいじめられ、役人には意地悪をされ、人々にはキリスト教だとして忌み嫌われ、学生たちには駄々をこねられていた（新島を困らせた学生の一人は大久保だったのですが）。甚だしいことに、居候をさせてもらっている学生までもが口汚く罵っていた。そんな時、新島先生は威厳を持って説得するどころか、黙って涙を流し、神に祈るだけだった。遠慮なく言えば、その姿は葬式をしている家の犬のようのみすぼらしかった。この時、心ないわたしは彼を我慢と真面目だけが取り柄のキリスト教牧師だとみなし、尊敬する気持ちは少しもなかった」というのです。

そして、回心後の印象をこう記します。「わたし大久保はほとんど10年間 躰いていた。回心した後に新島先生に会ったが、そこにかつての彼はいなかった。ただ涙を流して祈るだけの人には見えなかった。変わらず冷静で寡黙ではあるけれども、その胸の内には計り知れない想いを抱き、その目には無限の慈愛が溢れていた。温かく優しいが、その心には鉄をも溶かす熱い意志があり、もはや侮ることのできない威厳と共に立ち尽くしていた。（中略）彼は暗闇の中で人を照らす大燈籠のような存在に見えた」。このようにその評価が一変していたことが分かります。

こうして同志社に戻った大久保は卒業後、約12—13年間、埼玉県や群馬県で開拓伝道や教会の牧師として働きました。新島は1890年1月に召天するのですが、新島は死ぬまで大久保に分厚い手紙と共に援助金を送り続けていたと言われています。

## 大久保、アメリカへ

キリスト教伝道者である大久保にとっての大きな転機は、1902年にハワイアンボード（Hawaiian Evangelical Association）を通じてアメリカのハワイ州ホノルルに移ったことです。そこでヌアヌ日本人教会（現・Nu'uanu Congregational Church, UCC）の牧師となります。ここでの活動の特徴は、この日本人教会をハワイアンボードから独立させることでした。

移民の教会はお金がなく、アメリカの教会の援助でなんとか成り立っていました。援助を受けた方が楽なのに、なぜ独立させるのでしょうか。教会の自治や独立は師であった新島が大切にされたことですが、他に要因を挙げれば、日本人移民に対してのアメリカ人宣教師たちの差別的対応があったと言えます。ヌアヌ教会を管轄するハワイアンボードの目的と役割は、日本人移民に福音を伝えること、そしてアメリカ人雇用主と日本人労働者間の様々な問題を調停、仲裁することでした。しかし、ハワイアンボードの宣教師たちの態度は、大久保たち日本人にとっては白人至上主義に根ざしたものに映っていたのです。大久保の娘・落実は「労働者として彼地にゆく日本人の牧師教師を自分等と同等に取扱ふ等の事は、彼等の念頭には更らに出来ない事だ」（同 143頁）と証言していますし、大久保は、たびたび宣教師たちの日本人労働者への扱いについて抗議します。大久保はこのハワイ時代に一冊だけ著書を著していますが、それは白人

至上主義への批判で溢れています。

大久保は約2年間ホノルルの教会で働いた後に、今度はアメリカ本土カリフォルニアに移ります。そして、当時設立されたばかりのオークランド日本人組合教会の初代牧師に着任します。これが現在のシカモア組合教会であり、わたしが一時期勤めた教会になります。彼はここでもすぐにアメリカの教会の援助から完全に独立し、自治を持つ教会運営ができるように努力します。数年後には、アメリカのミッションから独立をさせてオークランド日本人独立組合教会 (Oakland Japanese Independent Congregational Church) となり、北米で最も早く、完全に自給自立した日系教会として知られるようになります。

アメリカにおいて、大久保が独立を目指す要因の一つは白人至上主義への反発ですが、同時に次のような信念があったと言えます。それは、援助する側とされる側のままでは主人と奴隷の関係を保てないこと。つまり、援助を受けて相手の顔色を窺ったままでは尊厳ある自分たちの意思決定ができないこと。また、もし苦境にある日本人移民を助けようとするのであれば、それはまず同胞である自分たちであること。そのためにはまず自分たち教会こそが自立し、仲間のために働くべきだという気概を含んでいました。

### 各教会、各教派を超えたキリスト教信仰連合体の設立へ

実は、先のオークランド日本人教会の独立を完遂するには資金が足りず、大久保はアメリカ各地に点在する日系コミュニティを巡回して募金集めをしています。この活動を通して大久保は、切り離されて点在する日本人移民を支えるキリスト教連合体の必要性を実感します。それは、一つの教会や教派では不可能なことから、教会や教派を超えて協力して行う必要があったのです。

『北加基督教會便覧』(北加基督教會同盟 1936年 47頁)によれば、1910年の1月17-19日、約20名の日本人教会のリーダーたちがカリフォルニア州アラメダにある教会に集結し、「北加基督教徒同盟」の設立が呼びかけられます。そして、大久保はその議長に選出されます。この団体はその後組織を再編成し、1911年には「北加基督教徒道団」と名称を変えます。その後大久保はオークランドの教会牧師を辞任し、各地を回って説教をする巡回牧師となって働きます。そして、体調悪化による休息と日本への一時帰国を除く期間は、カリフォルニア州のほぼ全域の日本人コミュニティを、さらに上はオレゴン州、内陸部はユタ州なども含めた広範囲を巡回して講演会を開き続け、1914年にオークランドでその生涯を閉じます。

まず大久保の特徴としては、アメリカの教会の影響から独立、自治を目指したこと。そして、特に教派を超えた伝道団設立に貢献したことを覚えておいてください。伝道団は移民先で孤独と厳しい生活をしている日本人移民をキリスト教信仰で支えるのが目的ですが、同時にその背景には、当時アメリカで高まっていた反日感情がありました。例えば、大久保がいたカリフォルニア州では1913年に外国人土地法が制定され、これによって外国人による土地の取得や売買の禁止、また借地権に厳しい制限が課せられました。それは当時苦勞の末に農業や漁業で成功していた日本移民を狙い撃ちしたものだと言われ、俗に排日土地法とも呼ばれています。この法案は1913年に成立していますが、実はそれ以前に何度も似た法案が提出されようになっており、随分前からすでに排日感情がアメリカ国内に高まっていたのです。

### 新島と面識のない自称弟子：清水安三

次に二人目の弟子、清水です。彼は1891年に現在の滋賀県高島市に誕生します。これは新島襄が召天した翌年ですから、新島と面識はありません。清水の祖父は農民でしたが本をよく読み、商才豊かな人物でした。特に当時の大阪と高島の米相場の違いに目をつけて米を運搬、販売して富を得、また農閑期に縮の織物を扱って財をさらに加えました。ですから清水は本来裕福な家で育っています(『自伝』『復活の丘』第2号 1955年9月1日)。

しかし、清水は2歳の頃に祖父を、4歳の頃に父を亡くします。父の死後、莫大な財産を継いだのは、安三と15歳以上も離れた長兄・弥太郎でした。彼は度を超えた遊び人です。滋賀や京都の花街では遊び足らず、東京の吉原まで遊び歩きました。豪快に遊び歩く長男が家を継いでから10年も経たない間に財産はほとんど散財され、清水家は経済的困窮に陥ります。長兄の遊蕩ぶりは結婚しても治らず、妻と2人の子どもがいたにも関わらず、やがて家を出て愛人が経営する旅館に移り住みます。そして、高島の自宅は縮小し、残した妻子と清水と一緒に大津に住まわせます。清水はしばらくそこで兄の妻子と生活するのですが、やがて兄夫婦の離婚を機に兄の妻が子どもを連れて家を出ると、清水は兄の愛人が経営する旅館に移り住むことになります。この愛人が経営する旅館は、清水自身によると半分クルフ(遊廓のように客が女性の体を買っ宿)だったようです。

清水にとって、そこは生理的嫌悪を感じる場所でした。家族の離散も生活困窮も、すべて遊び歩いた兄の欲望と散財が招いた結果であり、清水は人の欲望がどれほど周りの人間を不幸にするかを体験しながら育ったのです。

### 苦しい幼少期と激しい劣等感

この時代の清水を理解する上で重要なのは、激しい「劣等感」を抱えていたことです。その原因の一つは、先程説明した家庭環境にありました。もう一つは、周りの優秀な友人との比較です。清水は次のように書き残しています。

「中学時代の私がどの学年でも落第すれすれの劣等生だったのにくらべて、私の親友たちは、だれもかもみな優等生だった。しかもその親友は毎年変わった。(中略) こうしたいずれも優秀な友達を親友にもっていたということは、私にとっては実はよしあしで、彼らと親しくしているうちに、いくじなくもいつのまにか、自分に劣等感を持つようになった。これがそのころの私のいつわらぬ深刻な悩みであった」(清水畏三編『石ころの生涯』改定増補第5版 桜美林学園 2009年 32~33頁)。

そんな劣等感に苛まれる清水を変えた「出会い」が二つあります。一つはウィリアム・メレル・ヴォーリズとの出会いです。彼はアメリカ人信徒伝道者で、日本では西洋建築の設計で広く知られ、滋賀県近江地方を中心にした「近江ミッション」(後の近江兄弟社)と呼ばれる医療、薬品、教育、出版など幅広い社会事業を展開した人物です。ヴォーリズは清水が通う旧制中学に週に一度英語を教えるに来ており、彼を通して清水はバイブルクラス、そして教会に通うようになります。清水にとってヴォーリズは「ウィリアム・メレル・ヴォーリズ(原文のまま記載)無くば、清水安三は必ずや、清水安三たりえなかつたであろう」(『復活の丘』第28号 1958年5月15日)というほど重要な存在ですが、ここでは割愛します。

### 可能性を持つ石ころ

そして、もう一つ清水を大きく変えたのが、新島襄の口ぐせとの出会いなのです。清水が17歳の頃、当時通っていた日本組合大津基督教会を会場に、同志社出身の牧師たちが形成する教派・組合教会が、大規模な伝道集会を開催しました。当時の組合教会を代表する面々(牧野虎次、西尾幸太郎、木村清松、堀貞一、長田時行、原田助、宮川経輝、海老名弾正、小崎弘道)が登場する力の入れようでした。清水はこの時、牧野が紹介した新島の言葉に心を揺さぶられて受洗を決意します。それは「新島先生は、よくこうおせられた。すなわち神は同志社のキャンパスにころがっている石ころさえも、なおよく新島襄とは成しうるのである」(桜美林学園チャプレン会編著『無我夢中―桜美林学園の創立者・清水安三の信仰と実践』新教出版社 2022年 17~18頁)というものでした。

この新島の言葉の背後には、マタイによる福音書 3章9節(マルコ、ルカにも並行記事)に登場する洗礼者ヨハネの発言があります。ヨハネは、神から選ばれた民であると驕(おご)る同胞のユダヤ人たちを戒め、神は石ころからさえも選びの民を興されると語りかけます。つまり、人間の誇りや思い込みや常識は、いとも簡単に覆されると教えたのです。この聖書の言葉を背景に、新島は自分を引き合いに出して、石ころのようなつまらない存在からでも神はいとも簡単に偉業を成し遂げる人物を生み出すと語り、自分は特別な存在ではないと繰り返し告げていたのです。清水はこの言葉を聞いて感動し、「そうだ! おれはたしかに石ころなのだ。けれども、神も利用したもうものならば、おれごとき者でも新島襄になりうるのだ。こらあ、なんたる福音だ」(『石ころの生涯』 33頁)と劣等感から解放される感覚を得ます。新島の言葉は、石ころのような劣等感を抱えた清水に大きな可能性を教え、自己認識の変革を迫るものであったのです。そして彼は同志社への進学を決意します。

先ほども言いましたように、清水は新島に会ったことがありません。それに関わらず、清水は戦後桜美林学園を設立した後、礼拝メッセージで繰り返し「わたしの頭の中には常に『新島襄になりたい』と願う気持ちがありました」と語り、実際に難しい決断を迫られる時には、新島の墓がある京都の若王寺山に登り、そこで祈るほど新島を慕っていたのです。この新島への強い想いは、清水が詠んだ詩「大学の設立こそは少き日に新島襄に享けし夢かも」となり、現在もこの詩が刻まれた石碑が、桜美林学園岡田キャンパス内に建っています。これでわたしが清水を「新島の自称弟子」というのが理解いただけたでしょうか。

通常、石は特別な鉱石でなければ価値が認められず、広場に転がる石は見向きもされません。しかし、その石を誰が、どんな目的のために配置したのか、という神の意思と計画の中で捉え直す時、清水はそこに開かれている自己変革の可能性を信じたのです。それは、現状では信じられない価値や可能性をみる視野の入手といえます。清水は背伸びしません。自分を宝石とは言わず、生涯の最後まで石ころを自認していました。しかし、石ころのような自分の背後にも神がおり、自分が進む先には大きな可能性が広がっている。こうして新島襄の口ぐせは聖書のメッセージと重なり合って、清水の新たな自己認識を支えていくことになります。

### 鑑真とペトキンを胸に中国へ

清水は同志社の神学部で学んだ後、中国へと渡ります。組合教会における中国行き宣教師の第一号でした。実は清水の同志社大学在学中に中国行きを志す出来事が起こっていたのです。

一つ目は、鑑真和尚の生き方に触れたことです。鑑真は昔の中国の高僧で、日本の使者から仏教を伝えてほしいと請われ、渡日を決意します。しかし、悪天候などで何度も計画は頓挫し、最初の決意から約11年目ようやく来日が叶うのですが、両目はすでに失明していたといえます。そして、日本で仏の教えを聞き、そのまま日本でその生涯を終えたのです。清水は異なる国の人のために視力だけでなく、命さえも捧げた姿に感銘を受け、いつか中国に恩返ししたいと考えるようになります。

二つ目は、学生時代に参加した聖書研究会でホーレス・ペトキンの生涯を聞いたことです。ペトキンはアメリカのイェール大学出身の宣教師で、中国の貧しい人々に無料で医療を提供する施療活動に従事した人物です。彼の中国での活動中、1900年に義和団事件(海外勢力を排除する動乱)が起こります。ペトキンは外国人ですから命を狙われます。そこで彼はすぐに妻子をアメリカの軍艦に避難させますが、自分は周囲の制止を聞かずに「羊飼いが羊を野原に置いて逃げることはできない」と言って施療を必要とする人々の元に戻ります。そして、そこで殺されてしまうのです。しかし、彼は亡くなる前に中国人の使用人に母校イェール大学宛の手紙を託していました。それは、中国でのミッション継続を要請する命懸けの手紙だったのです。この話を聞いた清水は、鑑真の時と同様に異なる国の人々のために命をかける姿に感動し、自分は「日本のペトキンになる」と決意し、中国行きの想いをさらに強めることになります。

清水は同志社大学卒業後、約1年半は軍隊に入隊して時を待ち、ようやく組合教会が宣教師を派遣することになった時、名乗りを上げて中国に渡ることになります。

## 北京での被災児童収容事業

清水は中国に渡り、瀋陽で貧しい農民たちの子どもを預かっては読み書きを教える児童館的活動をスタートさせます。当時、日本政府は満州での実効支配を推し進めるために大量の移民を入植させようとしており、清水たちは政策に便乗する形でまとまった土地を得ることができました。しかし、その土地の利用方法において、清水と派遣団体の組合教会との間で意見が分かれます。組合教会は、中国に渡った日本人の魂のケアのために使うよう求め、清水は中国の土地だから現地の中国人のために使うべきだ、と意見が分かれます。結果、清水はそこから600キロ以上離れた北京に異動させられてしまいます。

これは清水にとって挫折の体験ですが、実はこの望まない異動がこの後の清水の人生を決定づけます。北京に移ってしばらくして、中国華北地方一帯に大旱魃<sup>たいさん</sup>が起こります。雨が降らず土地は干上がって農作物ができません。窮地に陥った農民の中に、子どもや妻を売りに出すケースが続出したのです。これに心を痛めた清水は、キリスト者としての責務を自問し、彼が出した答えは「次の収穫期まで子どもたちを引き取って面倒を見る」ことでした。それによって子どもを保護し、また、親も自分たちだけならなんとかこの窮地を乗り越えられると考えたからです。

実はこのアイデアにはモデルケースがあります。1905年に日本の東北地方一帯が大凶作に見舞われた時、岡山で孤児院を開いていた石井千次<sup>いらいせんじ</sup>というクリスチャンが東北を回って子どもを引き取り、次の収穫期まで岡山の孤児院で面倒を見たのです。合計825人を預かったと言われています。清水の姉がここで働いていたので、この事業について聞いていたのでしょう。目前の状況に石井のケースが適応できると考えます。成すべきことは決まりましたが、しかし問題があります。当時28歳の清水、中国に来て数年の清水には、それを可能にする地位も財も人脈もありません。そこで彼は各方面に手紙を書きます。すぐに返事をくれたのは当時、日華実業協会の会長だった渋沢栄一<sup>しぶさくえいいち</sup>でした。渋沢は清水を被災児童収容所の所長に任命し、資金は工面するからすぐにその事業を始めるようにと、返事をくれます。そこで清水は村を周って679名の子どもたち（799名とする資料も）を預かって面倒を見たのです。そして、次の収穫期にその多くを親元に返すことができました。

## 尊厳を取り戻す崇貞学園

被災児童収容事業はこれで終わるのですが、清水は日華実業協会から謝礼と余剰金として約500円を受け取ります。自分のために使えば良いのですが、彼は連れ合いの美穂と相談し、「元々は中国の子どものために捧げられた献金だから、中国の子どものために使う」と決めます。その時、脳裏に浮かんでいたのは、彼らの活動地（朝陽門外）の惨状でした。朝陽門外は北京随一のスラム、また、中国でも有数のスラムでした。そこで清水たちは、貧困の故に売買される子どもたちや、僅かな現金を得るために路上に立たされて体を売られる少女たちのことを考えます。そして、その子どもたちが自活するための学校、それも無料で通える学校の設立を決意します。知識の伝達だけでは現状は改善しないので、現金収入を得るための技術を習得させようと手差しの刺繍を教えます。そして、生徒たちの作品は販売し、利益は学校の運営資金に回す。その代わりに生徒は無料で通える学校にしたのです。

清水の学校で学んだ子どもから今度は親が技術を学びます。すると、この手差しの刺繍は後にこの朝陽門外の一大地場産業に変わります。皆が同じことをすれば学校商品の売上は激減しますが、それでも現金収入によって貧困が改善されることを清水たちは喜びました。

この学校を清水夫妻はすぐに「崇貞学園」という名前にしました。当時10銭、20銭という安価で売られ、踏み躪<sup>ふみ</sup>られていた少女たちの貞操をもう一度高め、尊いものにするという意味で「崇貞」と名付けたのです。この学校は第二次世界大戦で日本が敗戦し、当時の中華民国にすべて接收されるまでの約24年間、多くの人の資金援助を得ながらスラムにおける教育の場となったのです。

日本の敗戦で全ての事業は接收、財産は没収されてほとんど全てを失った清水夫妻は、敗戦の翌年、引き揚げ船で日本に帰国しました。その後、日本に着いてわずか1ヶ月半で学校認可を取り付け、桜美林学園を立ち上げます。こうして中国の崇貞学園の夢の続きが開始されます。この驚愕的なスピードにもドラマがあるのですが、時間の関係で清水についてはここまでにします。

## 大久保と清水の共通点

まとめに入っていきます。本日紹介した大久保真次郎と清水安三との共通点とは何でしょうか。一つ目は、二人とも新島の生き方や言葉に感銘を受け、尊敬と憧れを持っていたことです。新島との出会い（その生き方や言葉）は、彼らのその後の生き方に多大な影響を与えています。

大久保の娘は、「當時父にとって先生は凡てであつた、其全全全霊に、我を知るものは先生、我を後援するものは先生、先生と共にこの事に當る」（『父と良人』88頁）と記し、大久保の想いを代弁しています。また伝道団の機関誌『新天地』（第5巻第6号 1914年6月1日）には、大久保と親交が深かった後輩牧師が大久保の召天（1914年5月）に触れて、「新島先生の『活動するは休息なり』との気象（気性）は師〔大久保〕の生涯に遺憾なく発揮された」（出典元〔 〕内は講演者注）と書いています。大久保が常に「新島先生のように自分は働き続けるのだ」と語っていたことが想像できます。

一方、清水にとっての新島は、受洗と同志社進学へのきっかけとなる人ですが、それ以上に彼の新たな自己認識を支える存在でした。新島の口ぐせ「神は同志社のキャンパスにころがっている石ころさへも、なおよく新島襲とは成しうるのである」は、自分のようなつまらない石ころでも新島のようになると成長と変革の可能性を指し示し、清水にとって新島は教育者としての理想（夢）となっていくます。どんなに現状がみすぼらしく、自分が「石ころ」のようにつまらなく思えても、常にその先の可能性に清水の視野を導いていきました。

二つ目の共通点は、それぞれ新島への憧れと同志社で学んだ良心を抱いて海外で活動した点です。それは人種問題や尊厳に関わる実践でした。大久保はアメリカにおいて同胞の日本人移民のために働き、一方、清水は中国において異なる国の子どもたちのために働きました。

## 二人の実践における相違

もちろん、この二人の実践には違いもあります。一口に海外での人種問題に関わる実践といっても時代や環境、対象は様々です。大久保の実践は、異国の地アメリカで数としては圧倒的少数者、また政治的権力としても弱者である同胞を支えようとする働きでした。そして、それは当時の白人至上主義とどのように対峙するか、という緊急の課題でもありました。そこにはサヴァイブ（生き残り）の側面があります。

一方、清水の実践は日清戦争の勝利以後、日本人がすでに中国大陸に入植しており、その実効支配を推し進めた文脈の中にあります。中国大陸における日本人移民の数は圧倒的に少ないですが、背後にある政治的権力や軍事力の点ではマイノリティや弱者ではありません。むしろ見方によっては力を持つ支配的少数者だったと言えます。

そして、清水の実践は同胞の日本人のためにではなく、第一には現地の中国の子どもたちのためでした。それは政治的に緊張関係にあった人々に仕えるものだったのです。さらに触れますと、当初、崇貞学園は中国の女子、続いて男子を受け入れて共学となり、その後日本人移民の子ども、さらには当時、日本の統治下にあった朝鮮半島にルーツを持つ子どもたちをも受け入れています。そこで清水の教育方針は、当時としては極めて異例なものでした。清水は、創氏改名で日本名を強いられた韓国、朝鮮の子どもたちを本名で呼び、自国の文化や言葉を大切にしよう教えています。カリキュラムの中にそれぞれの母語と文化を学ぶ時間を取り入れていたのです。

崇貞学園は、中国と日本、そして韓国、朝鮮の子どもたちが共存する当時としては珍しい学校でした。後で触れますが、清水はこうした中国での活動を債いや和解、共生のための「愛の事業」だと認識しています。

## 相違における考察：大久保について

次にそれぞれの違いをもう少し考察したいと思います。大久保は伝道団の目的をどのように考えていたのでしょうか。伝道団には月に一回発行する『新天地』という機関紙があり、ちょうど伝道団発足から一年の記念号に大久保の文章が掲載されています（『新天地』第3巻第6号1912年6月1日）。そこで大久保は伝道団の役割を三つ挙げています。一つ目に、「排日を防ぐ」を掲げており、伝道団を通して日本人排日<sup>はいにち</sup>の機運を改善させるということです。

二つ目に、「同胞を白人同様に発展」させるとあります。日本人移民を白人同様に豊かにするという意味ですが、これにはある前提が必要です。それはアメリカへの定着で、その社会に受け入れられることが必須です。アメリカ社会に同化し、受け入れられて定着し、発展していくという道筋を考えていたのです。

これら二つの目的を果たすために大久保は、三つ目の目的として、伝道団を通して日本移民社会を「クリスチアンナイズ〔キリスト教化〕」（出典元〔 〕内は講演者注）することを掲げています。大久保たち伝道団が考える排日原因の一端は賭博と風俗、つまり風紀の問題にありました。移民は本来ある一定期間アメリカで働いて財産を持って日本に帰ることが想定されていました。しかし、移民労働者の中にはせっかく稼いだ金銭を賭博で失い、またある人は借金を抱えてアメリカ人雇用主との契約を破棄して逃げようとする人がいたようです。こうしたところで信用を失っていると考えられます。また、風俗については、アメリカの特にプロテスタントが嫌うことなので、それが日本の移民コミュニティにあると信頼を得られないと考えています。大久保はまずアメリカのプロテスタント教会の協力を得て、それからアメリカ全体の排日気運を変えることを考えていました。ですから、風紀の乱れはその大きな妨げになります。だからこそ、風紀を改善するために日本人移民社会のキリスト教化を目指したのです。

また、彼は同じ記事の中で「アメリカ合衆国の真中に小日本国を作らんとする」ような動き、つまりアメリカ社会に同化せず、かたくなに日本の忠君愛国の姿勢や古い慣習に固執することを戒めています。けれども、これについては疑問が付きまします。なぜかという、この数ヶ月後に明治天皇が逝去するのですが、その際に『新天地』2か月号分に渡って、大体的に天皇について取り上げています。ここでいう大久保たちの「同化」とは、一体何を意味するのでしょうか。それは、排日を防ぐための一時的な態度で、表面的に慣習はアメリカ風にするが内面的な精神は変えないものであったのか、それとも2、3世とアメリカに生まれアメリカ人として生きていく後の世代の将来を見据えたものであったのか、一貫性がいまち見えてこないのです。

そして、大久保の文章には、やや国粋的な表現、あるいは日本人移民の優越性を説いた文章が散見されます。先ほど大久保の活動はサヴァイブの側面があるときましたが、これには排日

気運の中で疲弊する日本人移民を鼓舞し励ます効果があったでしょう。しかし、同時に自分たちの優越性を過剰に語ることで、実は白人至上主義から自分たちが劣った者として見られたその差別的視野を、知らぬ間に自分たちの中に醸造する危険があると思います。つまり、「他の移民やマイノリティに比べて、自分たちは優秀で特別な民族だ」という発想です。

大久保のマインドは、どちらかといえば人々を教化し、導いていく武士的なものと言えます。実際には彼は農民出なのですが、かつての熊本医学校時代から武士階級出身者たちに揉まれてきたからでしょうか。あるいは彼の妻が武士階級出だったからでしょうか。大久保や彼の娘・久布白落実の文章には自らを武士とし、武士精神を語るものがあります。誤解のないように補足をすると、大久保はただ上から偉そうに語る人ではありません。実際には伝道団発足から彼が死ぬまで、病氣療養時や一時帰国を除けば約2年間、命を削りながら広範囲を回って演説をした人、つまり、誰よりも同胞移民のために働いた人物でもあるのです。

### 相違における考察：清水について

それに対して清水ですが、彼は中国での働きを面白い言葉でまとめています。清水の著書『北京清潭・体験の中国』（教育出版 1975年）の中で、彼は中国での活動に対して、「中国人の足を洗う事業」という言葉を使っています。聖書において「足を洗う」は重要な象徴的行為です。ヨハネによる福音書 13章には、イエスが死ぬ前夜に弟子たちの足を洗うことで愛を表現した箇所があります。当時、足は身体の中で最も汚れる箇所で、それを洗うのは奴隷の仕事でもありました。つまり、ここでイエスは、奴隷のように弟子の汚い部分に触れて、仕える姿を示したのです。

清水の中国行きは本来、鑑真やベトキンへの恩返しや憧れに端を発しています。しかしその清水の意識は、実際に中国で働く中でやや変わっていったようです。清水は中国で何を見ていたかという、日本の実効支配が強まる中、その軍隊や移民が中国人から奪うことしか考えていない様に痛みを感じていたのです。そうした中で、罪滅ぼし、あるいは和解や共に生きるための愛の事業が必要だと考えるようになります。清水は、その社会の負や歪みが最も堆積する場所、誰も手をつけたくないスラムに触れて洗おうとしたと言えます。この清水の視野には、大久保のような優劣の発想はありません。

このように清水のある種の謙虚さは、やはり彼が半農半商の子として育ってきたこと、そして、何より彼が幼少期から劣等感と格闘したこと、また、その中で新島の口ぐせを通して「石ころの精神」を確立したことに由来するでしょう。自分は石ころだ、という謙虚さと、しかし、その石ころには大きな可能性があるという大胆さが清水の中で同居しており、それは他者との比較や優越性に固執しないものなのです。

### おわりに

大久保と清水の実践は、現在のいろんな学術的見地から分析すれば、課題はいくつもあるでしょう。今回それらのすべてには触れられませんが、しかし一つだけ明確なことがあります。それは、少なくとも二人の実践はそれぞれが生きてきた時代と場所において必要な働きであったということです。その必要性を認識させ、また、勇気を持って実践へと駆り立てるもの、それこそが「良心」だと言えます。そして二人の生涯を見ると、その良心とは何か均一的なものがあるのではなく、それぞれの人生や生き様、時には挫折や失意の体験（二人とも挫折と失意を経験）などを通して生まれていくのだ、と考えさせられます。

今日も人種の問題、差別の問題があります。尊厳が歪められる時代とも言えるでしょう。今を生きるわたしたちにとって、同志社スピリットとして受け継ぐ良心とは何か、自問していきましょう。

2022年11月8日 同志社スピリット・ウィーク秋学期  
京田辺校地 「講演」記録